

マゾンの「例示的用法」覚書

鈴木 泰

I 典型の現在

奥田靖雄 (1992) は、

作家たちは、過去の出来事を記述するにあたって、過去の出来事をあたかも目のまえで進行しているがごとくえがきだすために、現在形をしばしば使用している。表現・文体的な観点から使用される、この種の現在形は、「歴史的な現在」とよばれている。(著作集 03, p. 63)

とのべて、次の例をあげている。

安吉たちは手前でとまって、駒込からくる電車をまった。気がつくやうに、すぐかどのたばこ屋でおもてをあげている。小娘がでてきて、かざり窓の外ぶたを外からはずす。ガラス戸の大戸のすきまから手がでて、バケツをコンクリートのうえにおく。小娘がバケツのなかからぞうきんをひきあげて、しばって、かざり窓のケースのへりをふく。バケツからは、湯がはいっているらしく、湯気がたっている。みると、となりでもおなじことをやっている。(むらぎも)

そして、それにつづいて、次のようにのべる。

この歴史的な現在にきわめてちかいものに「典型の現在」がある。この用法は、典型的な場面のひとつを具体的なすがたにえがきだすときに利用されている。したがって、いちいちの具体的な動作がもっている、時間的なありか限定ははぶかれていて、テンス・アスペクトのかたちは、出来事の同時性と継起性を表現している。

その例としてあげるのが、次の例である。

そういう時刻に、こころみにあるひとつの停留所にたってみると、いつでもほとんどきまったように、つぎのような周期的の現象がみとめられる。

まず、停留所にきてみると、そこには十人ないし二十人のむれがあつまっている。そうして、大多数の人はいずれも熱心に電車のくる方向を気にして、おちつかない表情を露出している。そのあいだに、むれの人数はだんだんますいっぽうである。五分か七分かすると、ようやく電車がくる。すると、おおぜいの人々は、おりる人をまつだけの時間さえおしむように、さきをあらそって、のりこむ。あたかも、もうそれかぎり、あとからくる電車は永久にないかのように、あらそってのりこむ

のである。(寺田寅彦随筆集)

II ロシア語における例示的用法

同様の指摘は、フランスのロシア語学者マゾン (1914 : 152) がロシア語の歴史的現在法についてのべるところにもある。

歴史的な現在-未来は原則的に 2 種類の用法にたつことができることを指摘しておく必要がある。まず、一度だけしか起こらなかった特別な出来事をものがたることができる。一方では、繰り返された、習慣的な出来事をものがたることができる。ここで、「繰り返された、習慣的な出来事をものがたる」用法とは、現代のロシア語学で「例示的用法」とされるものである。例示的用法については、金田一 (1988 : 2) が次のようにのべている。

この用法は、**Маслов** の命名によるもので、出来事全体から任意の一回の出来事を具体例として取り出し、全一的に示すことによって、その出来事が全体としては繰り返されている行為であることを表現する用法である。例えば、**Как увижу самолёт, сразу вспоминаю первый день войны.** (私は飛行機を見るといつもすぐ戦争勃発の日を思い出す)、という例で、“飛行機を見ると戦争勃発の日を思い出す”という行為が私にとって日常繰り返されていることが、この完了体現在形 **увижу** によって表現されている。この用法は、反復行為を一回の典型によって明示することによってより生き生きとした効果を引き出すもので、主に会話のテキストや小説、詩などの中で用いられる用法である。

このように、テンス・アスペクトの形によって典型的な場面の一つを具体的に描き出す用法が例示的用法である。ロシア語における「例示的用法」という現象は、古くからマゾン、マスロフ、ボンダルコなどの言語学者の注意をひいてきたが、この現象そのものを対象として行われた研究は多いとはいえない。なお、鈴木泰 (2009) は、ロシア語におけるアスペクト研究に学びながら、例示的用法を、古代日本語の完成相の個別的意味の一つとしてみとめているが、例示的用法をめぐる議論は日本のアスペクト研究分野でもあまりなされていない。したがって、本章では、まず、ロシア語のアスペクト研究を中心にすえて見ていく。最後に、古代日本語に例示的用法をみとめた鈴木の研究も紹介する。

ロシア語のアスペクトは、完了体、不完了体に分けられ、マスロフ (1959 : 106) によれば、その意味は、それぞれ、抽象度の高い順に、一般的意味、個別的意味、付加的な意味・ニュアンスという 3 つの階層に区分される。例示的用法が現れるのは個

別的意味の階層である。そして、さきに金田一のあげたような例は次のように説明される。

こういったケースを**例示的意味**（Наглядно—примерное значение）、何回も起こる出来事の「例示化」（партикуляризации）（Mazon1914 : 49）としよう。よくある典型的な事柄が、ここではいわば具体的な例で分かりやすく描かれ、反復される限りない連続が「形の上で」1つの個別ケースとして表現されるのである。例示的意味は、実際には両方の体 —слазу открoет/открoывает окнo— で表現されるが、完了体の方が不完了体よりもよく使われる。

マスコフが体を形態論の枠内で捉え、純粹に抽象的な理論モデルを構築しようとするのに対して、ボンダルコはより具体的（1971 : 22）な現実、文脈に対して有効なものとして体を捉えなおそうとする。そこで、「例示的用法」に関しても、

繰り返しの出来事の提示のこの方法に、形象性、造形性の要因が存在している。行為の反復性は、典型性と具体性の独特の組み合わせの基礎の上に伝えられている。動詞の形態自体は、まるで具体的なものであるかのように行為を表す：一つの具体的な事実が全体として提示される。しかしながら、それは《具体性のみせかけ》にすぎない。コンテキストは、その行為が繰り返されることを示す。具体性、一回性を通じて、典型が伝わるのである。

のように、意味・機能の側面を重視した分析を行っている。ロシア語におけるその表現性については、以上の説明とはやや違うが、次のような、ラスードヴァ（1968 : 7）の定義もある。

具体的、特定的一回の動作の生起という定義から、具体的、特定の状況への固定という条件を取り去ると、任意の一つを取り上げることになるが、任意の一つ、ということは、どれでもよいから一つ、ということだから、一つの個別を通して全員、全体について語ることになる。一つの例、個別を通しての一般化を例示的用法という。

さらに Forsyth（1970 : 174）の定義を援用すると、以下のようなになる。

例示的用法とは、周期的に起こる（複合的な動作一般）を、平板にではなく、一つの場合、一つの完結した行為を選んで、それを周期的に起こる現象のサンプルとして提示することにある。

マスコフはこの例示的用法は古代ロシア文章語の完了体インパーフェクトにさかのぼりうると考える。以下の引用はマスコフ（1959 : 160）がその用法の現れる環境の1つであるとする複数回ペアタイプという場合についてであるが、他の場合にも読み

替えることができると思われるので、その説明を引用する。

最初に、ここでは紛れもなく複数回性が問題になっていることを指摘しておく。
 ...(略)...各例で本質的なのは、そこに互いに相関する2つの動作が存在し、それらは時間の中でしっかりとした順次的結びつきを持っているという点である。...(略)...
 言い方を変えれば、ここでの複数回性は「括弧の外に出されて」おり、両方の動作が複数回であるが、それは各動作がそれだけで複数回であるというのではなく、相互間のしっかりとした順次性で強くお互いが結びついている両方の動作が「ペア」で、「サイクル」で、複数回であるということだ。このことはおおよそ $(a+b) \times n$ という公式で表すことができる。公式の中の a は第1の動作、 b は第2の動作、そして n は、はっきりとは明示されていないある量の「回数」である。

そして、こうした意味を表す完了体インパーフェクトが生まれる必然性を、さらにマスコフ (1959 : 183-184) は次のように説明する。

1. 状況全体から取り出した時間の断片からも、その状況に典型的な特徴が得られるということが条件づける複数回性と、2. 個別の各サイクル内部における動作間の内的関係が条件づける完了性とが結合する。まさにその結合こそ、この興味深い形式、つまり、完了的なアスペクトの意味を基礎に作られたインパーフェクト形の選択を命じている。

こうしたロシア語の例示的用法をめぐる所説に拠りながら、鈴木 (2009 : 282) は、実例から、古代日本語完成相にも例示的意味が見出されると主張している。ここで、その例をあげておく。

大臣、申して云はく「...象を船に乗せて水に浮かべつ。沈む程の水際に墨を書きて注を付けつ。その後、象を下ろしつ。次に船に石を拾ひ入れつ。...」と申す。

〔「象を船にのせて水に浮かべます。沈んだところの水際を墨で印を付けます。その後、象を下ろします。次に船に石を拾って入れます」と、大臣は象の目方の計り方を説明する〕 (今昔・五・三)

これは、現代のマニュアルの用法であるが、一定の順序の運動のサイクルが繰り返されるというその性質から例示的用法とみなされる。なお、古典語において例示的用法とみとめられるのは、完成相ツ、又の場合だけでなく、不完成相と考えられる基本形の場合もある。

それに、殿どもの立て様・造り様、宮々の御方の女官どもの唐衣、ちはや着て歩き、殿上人、蔵人の出しうちぎをし、織物の指貫を着、様々にさうぞきて通るを、この五節所の内に集り居て、ただこれ等に目をつけて、追ひしらがひて、簾の許に

出で重なりて見けるに、殿上人近く寄れば、屏風の後に逃げ隠るる間、前に逃ぐる人は、後に逃ぐる人に指貫を踏まれて倒るるに、後の者も又つまづきて倒る。或は冠を落し、或は先づ我れとく隠れむと惑ひ入る。入りなばさてかがまり居たるべきに、又少しの者も渡れば、追ひしらがひて出でて見る。(今昔・二八・四、佐藤謙三校注・角川文庫による)

[それで、この五節所の内にかたまって、御殿の建て方・造り方、各宮様に仕える女官たちが唐衣からぎぬや襷ちはやを着て歩く姿、殿上人や蔵人が出桂いだしうちぎをして絹織物の指貫さしぬきを着け、さまざまに着飾って通る様子などを、好奇の目で追い求め、簾のそばまで出てきて、折り重なるようにして見る。殿上人が近くに來ると、また屏風の後ろに逃げ隠れる。先に逃げた者があとから來る者に指貫の裾すそを踏まれてひっくり返ると、あとの者はそれにけつまづいてまた倒れる。ある者は冠を落し、ある者はわれ先に隠れようとあわてて屏風の後ろに飛び込む。入ったなら、そのままかがんでいけばいいのに、またちょっとした人でも通ると、先を争って追いかけて出て見る。]

本例は、尾張守の五節所に殿上人や蔵人が訪れてきた際に、宮中のしきたりを全く知らない守の家の人々が、おどおどしながら好奇心に駆られ、先を争って殿上人や蔵人をのぞいて見る滑稽な様子を描いている。「後ノ者(あとの者)」、「或(ある者)」は動作主が不特定であることを示している。「又」という副詞が使われていることは、「倒ル(倒れる)」「入ル(飛び込む)」「見ル(見る)」によってさしだされたのが繰り返される運動であることを示しているものと考えられる。しかもそれは単純な運動のくり返しではなく、継起的関係にある運動の交代による総合的な現実的な反復を表しているので、まさに例示的用法であろう。こうした用法は、例示的用法は、典型的でないとしても、古くから動詞基本形のアスペクト的用法としてしばしば見いだされる。

Ⅲ マゾンの例示用法

マスロフによれば、体の個別的意味の記述をはじめたのは、フランス言語学者のアンドレ・マゾン(1914)『ロシア語動詞のアスペクト』である。また、さきに引いたマスロフ(1959: 106)からもしられるように、例示的意味の研究は、マゾンからはじまったので、マゾンにおいて例示的意味がどのように規定されているかを知っておくのは必要であると考えたことが、特にここでマゾンの議論をとりあげる理由である。そこで、まずマゾンの著書の目次を表に示し、その概要について紹介し、その基本となる考えを示しておこう。

第一部 動詞の非時間的形式	第二部 動詞の時間的形式
<p>第I章：不完了体不定詞 展開途中の一時的な運動 反復的運動 一般的な運動</p> <p>第II章：完了体不定詞 全体的な遂行の中で考えられる 一時的な運動 一体性に還元された反復的運動</p> <p>第III章：不完了体命令法 展開途中の一時的な運動 反復的運動 一般的運動</p> <p>第IV章：完了体命令法 全体的な遂行の中で考えられる 一時的な運動 一体性に還元された反復的運動</p> <p>第V章：非時間的な形式の後の アスペクトの意味的定義とその 定義のロシア語動詞システム全 体への適用</p>	<p>第VI章：不完了体現在つまり狭義現在 展開途中の一時的な運動 反復的運動</p> <p>第VII章：完了体現在または現在-未来 全体的な遂行の中で考えられる一時的 な運動 一体性に還元された反復的運動</p> <p>第VIII章：迂遠的な不完了体未来 展開途中の一時的な運動 反復的運動 一般的運動</p> <p>第IX章：不完了体過去 展開途中の一時的な運動 反復的運動 一般的運動</p> <p>第X章：完了体過去 全体的な遂行の中で考えられる一時的 な運動 一体性に還元された反復的運動</p> <p>第XI章：不完了体条件法と完了体条件 法</p> <p>第XII章：過去分詞及び現在分詞</p>

マゾンの議論は、その後現在にいたるロシア語文法が不変的意味や対立関係に基礎をおいて体のちがいを見ようとするのに対して、体の個別的意味に注目した点に特徴がある。形とそれが表す意味を追求するという素朴ともいえるその論述の方針は日本語に同様な用法を見いだせないかと考えようとする立場からいうと、むしろしたがいがやすい。

本書は12章からなっている。不完了体と完了体におけるそれぞれの叙法形式における意味の出現のしかたは同じであり、基本的に、不完了体では述語形式を通じて、「1.展開途中の一時的運動、2.反復的運動、3.一般的な運動」に分かれ、完了体では述語形式を通じて、「1.全体的な遂行の中で考えられる一時的な運動、2.一体性に還元さ

れた反復的な運動」に分かれている。これは、各叙法について基本的に一回的意味のものと、多回反復的意味のもの、すなわちアクチュアルな意味をもつものと、非アクチュアルな意味をもつものとの2つに分けて論が進められており、日本語でも同じ観点で分析が進められてきているので、その分析との対照がたやすくできる。ただし、完了体の反復的用法の特徴として、狭義反復的意味と一体性に還元された反復的意味というようにさらに分けられていることは注意を要する。いずれにせよ、本書の論述の進め方にしたがうなら、不完了体と完了体をその枠組みごとに比較することができ、叙法ごとのアスペクト性のちがいが分かるしくみになっている。以下、マゾンのアスペクト論の特徴、特に例示的用法の特徴について検討する。

1、不完了体と完了体のアスペクト的意味

マズンは、動詞のアスペクト的意味と時間的観念の相関を重要視して、本書の構成において、第一部「動詞の非時間的形式」と第二部「動詞の時間的形式」という、時間性の有無による大別を行う。その理由は、マズン(1914: 240)にのべられているように、

アスペクトはある意味で時間から解放されており、独立性を主張することがしばしばあるにしても、**アスペクトが最も確固たるよりどころをもっているようにみえるのは時間の中においてである**。時間がなくなるところでは、つまり不定法または命令法では、アスペクトは弱まる；対立は弱まる；ニュアンスはぼける；

からである。しかし、マズンは、アスペクト的意味は時間的観念の作用下にあることを主張しつつも、結局は時間性のある叙法においても、ない叙法においてもアスペクト的意味は基本的に変わらないとし、ロシア語の動詞構造における、時制範疇に対するアスペクトの範疇の優位性をみとめる。マズン(1914: 239)では次のようにのべる。

時間の中における出来事についての時間的観念は、不完成または完成、線的な展開または点的な集中、反復または一体という固有の観念によって**区別**される。かくして、アスペクトの論理的な厳密性は、はじまるとすぐ完成する運動を表す現在形にそっくり未来の意味をおしつけ、展開途中の運動の表現に現在の意味を限定した。

以上のように、ロシア語動詞完了体現在形が現在-未来形になる所以に関してアスペクト的範疇の優位性によって説明している。また、現在-未来形の非時間的な用法についても、以下のように説明する。

過去や未来と同じように現在にとってアスペクトはつねに第一義的である；時間

における出来事の正確な観念は副次的でしかない。そこから、ある場合には歴史的現在の意味、あるいは格言的意味の、いわば現在-未来の非時間的な用法も生まれる。

非時間的な動詞形式である不定法と命令法の不完了体と完了体の様々な用法は、現在においては以下のマゾン（1914：101—102）では次のような法則に定式化される。

A. **不完了体**アスペクトは、展開中の一回的な運動であれ、反復的な運動であれ、表す。定的な不完了体は、一回的な運動の表現において、より明瞭に保持され、不定的な不完了体は反復的な運動の表現においてより明瞭に保持される。

B. **完了体**アスペクトは、その完成において、したがってその結果において考えられる一回的な運動を表す。

しかし、もし、この法則が、次のようにそれぞれ補足されるなら、この法則は、非常に厳密になり、したがって不正確さが減るか、少なくとも曖昧さが減る。

A'.不完了体アスペクトによって表される一回的な運動は、発言者が原理的に問題を提起して**一般化**されていると考えられる。他方、定的な運動は、行為の印象的な一体性作り出そうという方向性の統一が、その展開と持続において想起された一回的な事実として現れるという条件のもとで、反復的な事実を表すことができる。不定体は、その性質上、複合的であれば、同様に一回的な運動の表現ができる。

B'.完了体アスペクトによって表される一回的な運動は、現実において繰り返されるが、話し手の思考によって一体性に還元された運動を表すことができる。一体性への還元は、結果の観念に基づいてであれ（**結果的な一体性への還元 réduction à l'unité résultative**）、**特定化 (particularisation)**、すなわち実際に繰り返される出来事の典型的な単独の例の助けによる例示によってであれ、生ずるのである。

そして、これは非時間的形式だけでなく、時間的形式においても、同じ原理によって説明されるとしている。そこでは、動詞の時間的形式の-の用法の1つとして、例示的用法についてマゾン（1914：241）は以下のように説明する。

いかに簡単であっても、その（完了体と不完了体の）分類は、アスペクトの領域の中の話し手の想像力の最も重要な本質的な傾向と、二つのプロセス：一方は**見て想起する傾向**、他方は**一般化と一体性への還元**：を少なくとも明らかにする：**見て想起する傾向 (Tendance à voir et à évoquer)** は、要するに、その展開と持続の中で一回的な運動を、反復の中での反復的な運動を、複合の中での複合的運動をふくみ、それを表す性質である。したがって、完成的アスペクトにむかうよりむしろ不

完成的アスペクトの方へむかい、抽象的な結果を指し示すよりむしろ運動それ自身を表すことになってくる。

2、一般化のプロセス

不完了体不定詞は、話し手の視点からある意味で**根本的な問題 question de principe**に言及するか、ないしは**状況の輪郭**をさだめるかする運動を表し、結果として拡大された一定の範囲において一般的意味に進む。

狭く、動詞の運動の完全に特殊な観念から、[疑問または感嘆の形式でのうけこたえの反駁がそのあとにつづく問いまたは推論をふくんだ、前と同じ運動の例における、広く、多少とも一般的な] 観念への変化がはっきりとよく分かる。問いや推論は、未来の一定の瞬間に実現すると想定される一つの明確な事実をのべるものである。(たとえば:«どうしてお前は、旦那に身代金を払って自由にならないんだい?»)。うけこたえの返答はあらためて同じ事実を指摘するが、しかし不明確に一般的にそれを差し出し、その実現を引き起こす根本的な疑問を提起する。(«自由になんぞなってどういたしましょう?自由になるどんな必要があるのか?») ([] は理解の補助に筆写が付した)

Послушай-ка, Хорь, — говорил я ему, — отчего ты не откупишься от своего барина?

А для чего мне откупаться?

「ねえ、ホーリ」と私はいった、「どうしてお前は、旦那に身代金を払って自由にならないんだい?」

「自由になんぞなってどういたしましょう? (獵人日記、ホーリとカーリーヌィッチ、中山省三郎訳・角川文庫、p.13) (マゾン 1914 : 24)

この一般性というのは、普遍的性質という意味ではなく、マスコフ(1959 : 243)によるなら、「過去の事実を具体化することなく、またその事実が実現される具体的条件を考慮することなく、総体として、事実そのものとして指し示すという」一般的事実の(общефактическое) 意味である。グローヴィンスカヤ(1982 : 141)においても、マゾンの説が一般的事実の意味を不完了体の意味として早くからみとめた説として注目している

3、一体性への還元のプロセス

結論の最後のところでマゾンは次のようにのべる。

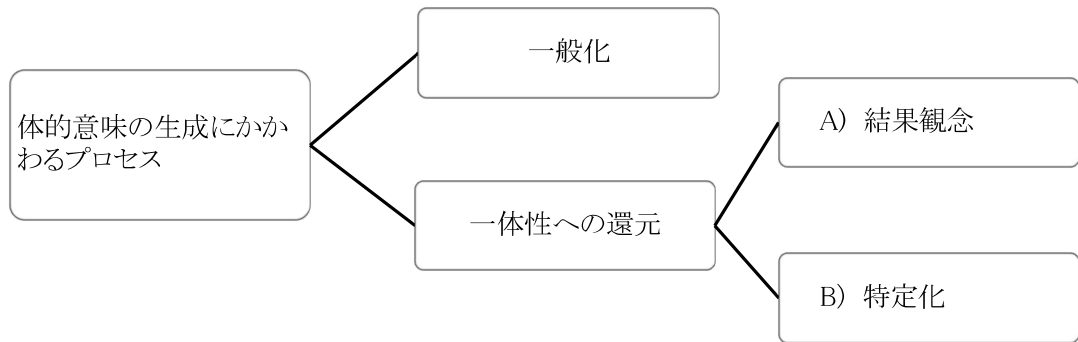
一体性への還元のプロセスは、時間的であれ非時間的であれ、完了体のすべての形式にあらわれる：それは、結果の観念によって一体性へ還元されるにせよ（**結果的な一体性への還元**）、その時に一度完遂されたものとして単純に表現されるにせよ（**特定化**）、反復的な動詞の運動に関する場合に、その形式の使用が確認されるのである。

結果の一体性への還元と特定化は、わたくしたちを驚かすものは何もっていない。第1の作用（一体性への還元）はわたしたちにとって普通になっている：具体化するよりむしろ抽象化する長い知的な伝統にささえられて、完了体のすべての形式にあらわれる：私たちは、気がつかずにロシア人の想像力がそれを適用するすべての場合だけでなく、ロシア人の想像力が介入しない他の多く場合にも適用している：それは、私たちが、ロシア語をはなすとき、通常は、過剰な**一般化**にいたり、その結果、完了体表現を濫用することになる。第2の作用、特定化は、それが実現するのは語りの技巧が、さまざまな段階で、すべての言語に共通しているので、私たちに等しく知られている。

見て想起する傾向と一般化のプロセスは不完了体のアスペクトの拡張にひろく貢献している；**一体性への還元**は、反対に、完了体のアスペクトが一定の既得権を保持しているというだけである。優越性は不完了体アスペクトにある。

そのうえで、**特定化**が完了体のシステムのプロセスであり、動詞の運動を**典型化**する必要に直接に関係があり、結局のところ、ロシア人の発想の本質的な傾向と思われる、見て想起する傾向にむすびついているといわなければならない。（マゾン 1914 : 242-243）

本書の大きな特色は、ある運動が、完了体動詞と不完了体動詞のどちらによって表現されるかという判断において、体の意味用法に重要な影響をおよぼす要因は、話し手の想像力、および意味生成のプロセスが決定的であるという認識である。マゾンによれば、話し手の想像力の最も重要な志向は「見て想起する」というメンタルな傾向、またプロセスとしては「一般化」と「一体性への還元」のプロセスである。このうち、「見て想起する」というメンタルな傾向は不完了体にかかわるものであるが、プロセスの方はそうではなく、「一般化」は不完了体の意味生成のプロセスであり、「一体性への還元」は完了体の意味生成のプロセスにかかわりがふかい。完了体、不完了体における反復的意味からそれぞれの体的意味がどのように生成されるかに注目するなら、以下の図のようになる。



このうち、特定化のプロセスを経たものが「例示的意味」にあたると考えられるので、まず「特定化」についてのマズン（1914：49）の説明を引いてその作用を確認しておけば次のようである。

特定化された運動（個別的なケースに還元された運動：露語版）は、一定の瞬間において一度遂行されたものとして表現された反復的または習慣的な運動である。現実的な過去の反復的な運動が、бывало の助けによって、直接に表される構文がもっともたやすくそのことが認識できるものである。

Так, бывало, и хочется подойти к ней, взять ее за руку и сказать: 人は彼女のそばへ行つて、手をとつて、かういひたくなる、(獵人日記、タチャーナ・ポリソヴナとその甥、角川文庫, p.284)

また、例示的意味は歴史的現在の語りの中によくもちいられ、それは例示的意味の特徴になっている。

歴史的な現在-未来は原則的に 2 種類の用法にたつことができることを指摘しておく必要がある。まず、一度だけしか起こらなかった特別な出来事をものがたることができる。一方では、繰り返された、習慣的な出来事をものがたることができる。(マズン 1914：152)

繰り返し、または習慣的運動は、そのようなものとして、歴史的な現在-未来の手段によって表されることはない：現在-未来は、話し手の想像がまるでその瞬間にのべられたように、生き生きと表されている、という 1 点だけによって特徴づけられる。現実の出来事の表現が、しばしばこのようにして、典型的な例によってかたちづけられる：

а сама (лиса) поминутно твердит:

Мёрзни, мёрзни, волчий хвост!

Волк скажет:

Ловися, рыбка, и м1ала и велика! — а лиса:

Мёрзни, мёрзни, волчий хвост!

自身(きつね)は繰り返し繰り返し歌いました。「凍れ!凍れ!狼さんのしっぽ!」狼が、「かかれよ、さかな、ちっちゃい魚も、でっかい魚も!」と歌うと、「凍れ!凍れ!狼さんのしっぽ!」と狐はそれに合せて歌うのでした。(アフナーシェフ・ロシア民話集 [1]、金本源之助訳・群像社版, p. 19) (狐に教えられ、狼が魚をつかまえようと凍った池に尻尾をたらしめているという話) (マゾン 1914 : 153)

マゾン (1914 : 241) において、「見て想起する傾向」が、「ロシア人の発想の本質的な傾向」であるとされることについては、フォーサイス (1970 : 353) に次のような批判がある。

マゾンによって構築された「アスペクトの構文的意味」は十分なものとはいえない。マゾンは、アスペクトの用法はもっぱら「話し手の想像力」が、特に「完遂途中の運動または反復的運動」を見て想起し、不完了体の本質的性質として差し出される、「一般化する」傾向にも、完了体の基本的な性質として差し出される、「一体性へ還元する」(singularise 単一化) 傾向にも、依存していると結論することになる。指示的な連辞機能のような不完了体の用法の説明、および「完遂途中の運動および複合的な運動を想起する傾向(tendency)」による、両方向的運動の表現に際しての説明は特にしたがいがたい。アスペクトは本来的に現実世界における与えられた運動にたいする話し手の主観的な態度を基本的には表すことは確かであるとしても、一定の文脈におけるアスペクトの選択は、マスコフがその定義の中で考えているように、かなりの程度まで意味、文法、表現的な強さなどの客観的な理由によって決定されるものであって、決して民族心理の特殊性によって決定されるものではない。

フォーサイスが、不完了体の用法である「連辞的意味」(「一般的事実的意味 *общефактическое значение*」) および「両方向的運動」(窓をあけたといえ、あけただけでなくしめたことも表すというような) の意味の成立にとって、「見て想起する傾向」という民族的想像力が働いているというのは賛成できないといっているのは了解できる。まず、「見て想起する傾向」をロシア人の民族的想像力とするのは無理であろう。同時に、一般的事実的意味というようなただ出来事を指示するだけの抽象的意味が「見て想起する傾向」から生まれるというのもやはり納得できない。ただし、フォーサイスは、不完了体、完了体それぞれの意味のひろがり、一般化と単一化という機構によって保障されているという見方については否定していないことには注意しておかなければならない。結果として、見て想起するという性質を実物教示性に通ずるも

のとらえるなら、何も民族的に特有なものではなく、そういう特徴が(マズン 1914: 153) がいうような「話し手の想像がまるでその瞬間にのべられたのように、生き生きと表されている」印象をあたえる例示的用法の特徴を作り出しているということはあるであろう。そうでないとすれば、例示的意味の特徴を言語に普遍的なものとして、日本語にももともとあるということも無理な話ということになるだろう。そのことは、(マズン 1914 結論: 243) の「**特定化**が完了体のシステムのプロセスであり、動詞の運動を**典型化**する必要に直接に関係があり、結局のところ、ロシア人の発想の本質的な傾向と思われる、見て想起する傾向にむすびついているといわなければならない」という一節にも現れていると考えられる。

なお金田一(1988: 12) は、「継起性を有する瞬時的反復現象を表現する場合に、常にこの完了体現在形用法を用いたのかどうか」と問題をたて、「「獵人日記」に次のような、完了体現在形でなく、不完了体過去形をもちいた例がある」として、「不完了体過去形を用いた場合は、文体的にニュートラルで、おもに恒常的・規則的な反復行為を表し、描写がより静的で、時にはより平面的な感じがする」としている。これは、過去形が使われた場合は例示的用法からはずれる可能性を示唆しているが、マズンは、ロシア語においては、例示的用法は現在・未来形だけではなく、次に引くように、過去形にも存在するとのべていることは注目される。

IX章〈不完了体過去〉の〈反復的運動〉の〈一体性に還元された反復的または複合的な運動〉ではつぎのようにのべている。

反復的または複合的な運動は、話し手の観念による一体性、完遂された動作の印象的な一体性を作り出すそうという志向によって一体性に還元されている。

Река катила темно-синие волны;

川は紺碧の波を立てて流れている。(獵人日記、エルモライと粉屋の女房、p. 30)

(マズン 1914: 201)

この部分はマズン(1914: 121)の〈不完了体現在〉の〈一体性へ還元された反復的または複合的な運動〉の、

特定の方向への決定性は、反復的ないし複合的な現実にある運動の印象的な一体性を作り出すことができ、それによって運動は一体性に還元されている。

という部分と趣旨としては同じであろう。

また、X章〈完了体過去〉の〈一体性に還元された反復的運動〉では次のようにのべている。

完了体過去が反復的な運動の表現に、不完了体過去が与えることのできない生命の息吹を与える場合がある：それは、完了体不定詞や現在-未来形に関してすでに知られている、一回的な例によって特徴づけられた習慣な運動の場合である。かくして：

Скорей! вон, кажется, виднеется сенной сарай... скорее!.. Вы добежали, вошли...

さあ急げ！むこうの方に干草小舎が見えるような気がする。...さあ急げ！駆けつける。中に入る...。(獵人日記、森と曠野、p. 207) (マゾン 1914 : 223-224)

マゾンの例示用法の論の特徴について、中澤英彦(1994 : 89)を参照しながら、考えてみよう。中澤の論とマゾンの論にはいくつか符合するところがある。

不完了体を用いた場合には、動作の恒常的・規則的反復の意味が表されるが、完了体の場合には、潜在的には生ずる可能性がありながらも、ある一定の条件・場合がなければ起こらない、逆に言うならばその要件をみたせば必ず起こりうるような、偶発的な可能性に基づく反復の意味が表される。

中澤の説は、潜在的可能性を表す用法を指しているふしがあるが、そうでなければ、マスロフ(1959 : 160)の「動作が«ペア»で、«サイクル»で、複数回的である」ということとも通底し、特定化された運動について、マゾンが「与えられた瞬間において一度遂行されたものとして表現された反復的で習慣的な運動である」という一節とも符合するのではないかと考えられる。

現代ロシア語学の議論では、完了体と不完了体の意味は対立するものとしてとらえられるのが普通だが、フォーサイスが、さきに「見て想起する傾向」を「完遂途中の運動および複合的な運動を想起する傾向(tendency)」としていることから明らかであるが、そのニュアンスは結局、不完了体の用法にもとづくものである。完了体の反復における一体性への還元によって、生き生きした描写となるということも、結局不完了体の本来もつ現実性の回復ということによれば、完了体と不完了体は相互に交渉するものとしてマゾンにおいてはとらえられているといえることができる。

例示的意味がどのように成立するのかを、マスロフが、ギリシャ語を継承したスラヴ語が時制形式を失う中で、体の分化を獲得してきたという歴史的变化の中に求めたのに対して、マゾンは体の相互交渉と想像力という二本立てで考えようとしたといえる。

これに対して、現代ロシア語学の、ボンダルコ、ラスードヴァ、フォーサイスなどはむしろ例示用法を個別的意味の一つとして確立したタイプとみてその構造とその表

現の効果を分析しようとしているものとみられる。とにかく、マゾンの功績は、完了体でありながら反復性をもつという矛盾した表現性の存在に気づき、それを完了体の一つの意味としてたてたことであろう。

なお、本書は、出典を明示して引用されている例だけでも 1000 例になんなんとする量があり、ロシア語の専門家でもない筆写のような日本語研究者が体の用法を確かめるのにきわめてちからになる。また、引用例の 9 割ぐらゐは翻訳があるのも大変ありがたい。

[付記：本覚書は、上海外国語大学博士論文「現代日本語における非アクチュアルな時間表現—例示的用法を中心に」(臧昉、2019) のために、本人の試論もとりいれながら備忘的に書き記したものである]

参考文献

- 金田一真澄, 1998, ツルゲーネフの自然描写における完了体現在形の例示的用法, (『ロシア語研究 1』木二会)
- 鈴木泰, 2009, 古代日本語時間表現の形態論的研究, (ひつじ書房)
- 中澤英彦, 1994, 現代ロシア語における動詞完了体による反復性と例示的意味の表現の問題によせて, (『東京外国語大学論集』48.)
- Вондарко, А. И. 1971, Вид и время русского глагола, М.
- Гловинская, М, Я, 1982, Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола, М. «Наука».
- Рассудова, О. П. 1968, Употребление видов глагола русском языке, СПб. (磯谷孝訳『体の用法 ロシア語動詞』1975 吾妻書房)
- Маслов, Ю. С. 1984, Очерки по Аспектологи, Л. (林田理恵・金子百合子訳 2018 『アспект論』ひつじ書房)
- Forsyth, J. 1970, Grammar of Aspect, Cambridge at university press.
- Mazon, André. 1914, Emplois des aspects du verbe russe, Paris, (パリ, スラヴ研究所, 1978, ゼロックス複製版、Маслов, Ю. С. 1962, Вопросы Глагольного Вида. М.の露訳も参照)